

スワーミ・ムクターナンダの言葉についての瞑想

イースターを祝うシッダ・ヨーガ・サツァング

イーシャ・サーデサイ

はじめに

シッダ・ヨーガの道では、グルの教えが人種、宗教、信条、国籍、文化的背景などの違いを超越することを学び、体験しています。私たちのグル、グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダは、先日、今年のマハーシヴァラトリーの際にもこのことについて語りました。それはまた、グルマーイのグルであるバーバ・ムクターナンダがサツァングでしばしば説いていた原理でもあります。

毎年イースターになると、私はこの真実を思い起こします。私は(少なくとも伝統的、宗教的な意味で)イースターを祝って育ったわけではありません。しかし、グルマーイのイースターに関する教え、そして彼女が常にイースターが象徴するものに敬意を払ってきたことから、私はこの祝祭日に特別な親近感を抱くようになりました。グルマーイが教えるように、イースターは目覚めの時、そして再び目覚める時です。それは、命の価値を思い出す時なのです。

これらのテーマは、グルマーイがイースターを祝って2026年4月4日に開催したシッダ・ヨーガのサツァングではっきりと表れていました。「春の息吹を吸い込んで」と題されたこのサツァングは、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムにあるバガヴァーン・ニッティヤーナンダ・テンプルからライブ動画配信されました。それは——グルマーイが「きらめく青いドーム」と呼んでいる——シッダ・ヨーガ・ユニバーサル・ホールで行われました。

サツァングの間、私たちはシヴァ神——すなわちアーディ・グル、至高なる自己の化身、この顕現した宇宙の多くの動きと変動を司る者——に祈りました。シヴァ神の保護の下で、生命は始まり、終わり、そして再び始まります。私たちは、シヴァ

神の太鼓であるダマルの原初の音オームと共鳴する躍動的な響きと、ミュージックアンサンブルが歌う歓喜の賛歌「シヴァ・シヴァ・シヴァ」に耳を傾けました。私たちは荘厳なダルバーリー・ラーガでナーマサンキールタナ「ジャヤ・ジャヤ・シヴァ・シャムボー」をチャンティングし、その後グルにアーラティーをささげました。また、サンスクリット語と南アジアの宗教の学者であるベン・ウィリアムスが、カシ(ヴァーラーナシーまたはベナレスとしても知られる)から私たちに語り掛けるのを聞きました。インド北部のこの都市は、インド文化と教典においてシヴァ神の住まいとして有名です。

グルマーイの要請により、ベンはバーバ・ムクターナダの精神的自叙伝『プレイ・オブ・コンシャスネス』から、グルマーイが選んだ一節を朗読しました。ベンは後に私に、それは『プレイ・オブ・コンシャスネス』の中で彼のお気に入りの一節だと話しました。それは、彼が十代の頃に初めて読んで以来、深く熟考してきた一節で、彼はこの物語を長年にわたり多くのシッダ・ヨーギや友人たちと分かち合い、話し合ってきました。ですから、ベンはグルマーイからその朗読を要請された時、その共時性に驚いたのです。

さらに、ベンはここ 2 年間、バーバの言葉について広範な学びを続けていると私に話しました。彼は毎朝、チャンティングと瞑想の前にバーバの本から抜粋を読むことを習慣にしています。ベンは言いました。「これは、私が今まで受け取った中で最も美しく、タイミングの良いセーヴァーの招待の一つでした。それは最近、全く新たな関係を築きつつあるバーバの言葉を読むことで、そしてその一節が私が心から大切にしてきたものだと分かったのです」

この一節で、バーバは死期が近づいていたある聖人の物語を語っています。地上での生涯が間もなく終わることを悟っていた聖人は、生涯を通じて自分を支えてくれた人々への感謝の意を表すことを忘れませんでした。最後に、彼は自分の体にも感謝しました。バーバは、聖人が自分の体に対して行った具体的な感謝の表現を詳しく述べ、そしてこの物語から私たちが学ぶべき重要な教訓を要約しています。

グルマーイは、今回のグルの言葉についての「瞑想」シリーズで、バーバの『プレイ・オブ・コンシャスネス』からの言葉に焦点を当てるよう私に要請しました。グルマーイは、バーバがここで私たちに伝えている人間の体、人間の命の価値を人々が理解することは不可欠だと説明しました。この世界では、人間の命が使い捨てるように扱われることがあまりにも多いのです。毎日、命が戦争、病気、飢饉(ききん)、自然災害、こういった類のその他の悲劇によって失われています。以前にも書いたように、死が私たちの周りで容赦なく、そして大規模に起こっていると、死に対して鈍感になってしまうのはよくあることです。特に、これらの死が私たちから遠いものと感じられる場合——つまり、私たちの知っている人や私たちが属するグループに直接影響を与えない場合——は、なおさらかもしれません。

死に慣れてしまうと——もしそれほど頻繁に起こらなかったら、衝撃的であると見なされたかもしれない方法で起こる死、率直に言って、「大量の」死に慣れてしまうと——命そのものも輝きを失ってしまうということが起こり得ると思います。矛盾しているように聞こえるかもしれませんが、世界はこういうものだとある程度受け入れてしまうと、ある種の宿命論が芽生えてしまう可能性がある、私は信じています。他人も死ぬ、自分たちも死ぬ、私たちは皆、呼ばれるのを待つだけの数字に過ぎない、と。命への向き合い方——自分自身への接し方、他人との接し方——において、私たちは不敬な態度を取るようになるかもしれません。私たちの意識の表面下でざわつく、言葉にされない問いは、「どうでもいいんじゃない？」です。

グルたちの教えが非常に力強い理由の一つは、私たちがこれらの教えに取り組む時——勤勉かつ注意深く熟考する時——この問いに対する答えにたどり着くことができるからです。私たちはその答えを体験することができます。命は「大事」であり、私たちはそれを存在の奥底で感じるすることができます。命は「尊い」ものであり、その幾多の理由を数え上げることができるのです。

今回の「瞑想」は、これまでのものとは少し異なります。まず、バーバの言葉に焦点を当てます。また、今回は私の熟考をもう少し…「簡潔に」…まとめます。「グルマーイの言葉についての瞑想」への皆さんのコメントがどれほど洞察力に富んでいるかについては既に話しました。皆さんがグルの言葉、そして私とその言葉に

関連して共有した考えや疑問について深く考えていることがよく分かります。私たちのデジタル・サーダナー・サークルは、インスピレーションと学びの非常に豊かな源となっています——私にとっては確かにそうですし、皆さんにとってもそうであることを願っています。

ですから、ある意味で、今月は「皆さん」にその役割を委ねることにします。もちろん、私の考えも幾つか共有します。私が自分自身に問い掛けているのと同じ質問を、皆さんにも考えていただきたいと思います。しかし、「皆さんの」考えが中心となり、バーバの言葉が彼が書いてから 50 年以上たった今でも、どれほど生き生きとしていて意義深いものであり続けているかを、皆さんと共に発見できることを楽しみにしています。

「スワミ・ムクターナンダの言葉についての瞑想」は、4 月のひと月を通してシッダ・ヨーガの道のウェブサイトで連載されます。あなたにも同意していただけたと思いますが、これは春の季節を迎え入れ、5 月のバーバ・ムクターナンダの誕生月のお祝いに向けて進むのに、最もふさわしい方法です。

